

太陽、月のふもとの御麓



この写真は、冠着山の西にある「古峠（ことうげ）」と呼ばれる場所から北側の千曲市を望むと眼下にみえる集落「御麓」です。「みろく」と読みます。呼び名とそれに当てられた漢字が昔から不思議だったので、この集落よりずっと下、千曲川の堤防近くに住み見上げていて気づきました。

この集落はさらしなの里で一番高地にあり、太陽と月がその後方の古峠を含む山並みの向こう側に沈むのです。太陽と月は、人々が手を合わせたり、自分を映し出したりして、信仰心を寄せる星だったので、「お天道さま」と「お月さま」がお隠れになるふもと（麓）という呼び名を与えたのかもしれない……

「みろく」と言えば「弥勒」という漢字もあります。「御麓」地区には、集落の人々が信仰心を寄せ、大切にしている「弥勒菩薩」の石像もあります。この菩薩様の存在も、「御麓」につながったのかもしれませんが。

古峠は古代、都と善光寺方面を抜けて日本海に通じる国道が通過するポイントだったとも言われます。その当時に御麓集落があったかどうか分かりませんが、写真の上方にある千曲川の流れとセットで里を眺めていたはず。集落の左側にはJR篠ノ井線の線路が走っています。この部分にもスイッチバックの構造が組み込まれています。太陽と月が上る東側の風景については、シリーズ172号をご覧ください。